

随想

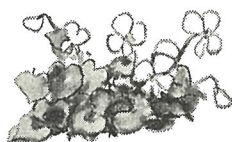
小さなレコード会社 の大きな「志」

井阪 紘

(株式会社カメラータ・トウキョウ社長)

64年大学経済学部卒業

十二月中旬、イタリア中部ウンブリアで、小さな教会を使ってバッハのオーボエソナタ集の録音をしていた。サッカーの中間田英寿選手が出て、日本人もこの地域の中心都市ペルージャの名前を記憶に留めるようになって



たが、そのすぐ隣に聖フランチェスコで有名なアシジがある。録音のあい間を見て、そのアシジのすぐ西南にあるバジリカ・ディ・サンタ・マリア・デリアンジェリという教会に、本格的なオルガンが新たに設置されたので、そのオルガンを使って二枚のレコーディングをしてほしいと依頼を受け、オルガニストのクラウディオ・ブリッツィと出かけた。この教会は聖フランチェスコが聖キアラーを「キリストの花嫁」として宗門に入る儀式をとりおこなったポルツィウンコラ礼拝堂の上に、十六

世紀になって、それを中に取り込んで建てられた教会で、イタリアで最も秀れたオルガンビルダーであるグイド・ピンキーが全力を挙げて新しい楽器を組み込んでいた。クラウディオとはオーボエ奏者トーマス・インデアミューレを通じて知りあつて、すでにヘンデルとラモ、テレマンの四枚のレコーディングを重ねて来た。私が事務局長をつとめる「草津夏期国際音楽アカデミー」にトーマスがレギュラーで講師を務めるようになって十年になる。今年の春はパリの国立図書館で一九九〇年代になって発見されたテレマンの「六つの協奏曲と六つの組曲」の一七三四年初版のパート譜による世界初録音を、イタリアのアブリアーノのオルガンとアローネ(テルニという街の近くの村)でチェンバロとオルガンを使つて行つた。その時に知りあつたのがピンキーさんという訳で、イタリアでも人の輪が少し

ずつ広がつて来た。

クラウディオが教会でほぼ完成したオルガンの試演を始めた。ピンキーさんと私は、教会の中央に座をしめて聴き入つた。小一時間も聴いている間に、私は日常を離れて、何か違った世界を彷徨っているような夢の中にいた。いや、時々ヨーロッパで仕事をしていると、自分がどうしてこんな場所にボツンと立つて仕事をしているのか自分自身、不思議な感覚に襲われることがある。

大学を卒業して十五年間、私は日本ビクターに奉職した。三十八歳の時、意を決して自分身のレコード・レーベル「カメラータ」を興した。今日なら流行りのベンチャービジネスとも言えるのだが、わずかな社員と一緒にインターナショナルのマーケットで勝負するレコード制作は、思った以上に棘の道で、それは今日でも変わらず続いている。

七十年代までの日本のレコード会社は、まずは外資系ないし、原盤ライセンスの提携会社で、制作と言えばローカルレコーディングと呼ばれる国内でしか通用しない大衆ヒット曲狙いのもののしか存在しなかった。その本質は今も同じで、したがって、国内からインターナショナルなアーティストは育つべくもなく、小沢征爾も、坂本龍一も、すべて外国のレコード会社が発掘し、プロモートして来た。その姿に、私は同じレコード制作者として悔しいと思う。

私はこの十年ほど年間七〜八回はヨーロッパに出かけている。ウィーンを中心に録音エンジニアと二人で、ウィーン・フィルの室内楽を中心に、ヨーロッパのトップアーティストと約百日間のレコーディングをするためだ。それが月二枚ほどの新譜になって発売される。会社が存続出来るかどうかは、私たちの作ったアルバムを、お客さん

が買い求めてくださるかどうかに賭かっている。

友人たちは「好きなことで生活が出来るのだから、そんな幸せなことはない」と言う。そう言われれば文句も言えない。ともかく、作品らしきものを残しながら、生活の糧を得ているのだから神に感謝すべきだろう。願わくば、我々の残した音源が「音楽」として永く聴き継がれることを祈るのだが……。

人生、色いろ やつてます

泉 令子

(カラーアナリスト)

70年大学文学部社会学科卒業

現在の私たちは、文字どおりいろいろな色が氾濫するなかで生活しています。もしも、この世に色がなかったら……。そんな想像をされたことはありませんか。色のない世界とはどんな

世界でしょう。モノクロの世界？でもモノクロの世界にも「白」と「黒」という色がありますね。光がある限り、色のない世界なんてあり得ないのです。

私たちのまわりには光が満ちあふれていて、私たちが見るものすべてに色があるのです。そして、私たちにはそれらの色を感じとることが出来ます。逆に言えば、色が私たちにさまざまなことを語りかけてくれているのです。しかし、私たちにとって色はあまりにも身近であることから、かえって無意識になつてしまっているのではないのでしょうか。色を上手に使うことで、あなたの魅力も倍増するはずです。

初めての人の出会うとき、私たちはお互い相手の服装や、年齢、顔の表情などを観察しています。そして自分にとってどのような人なのか、つまり親しみやすい人なのか、怖そうな人なのか等をチェックしています。

このチェックにかかる時間は、たった七秒とされています。言い換えれば、人の第一印象は七秒間で決まるということです。この大切な瞬間、視覚から入ってくる「色」の果たす役割はたいへん大きいということです。「好きな色だから」とか「無難な色だから」ということだけで選んだ色が必ずしも自分の印象を良くしているとは限りません。

自分に似合う色、つまり自分らしさを引き出して、自分を生かしてくれるパーソナルカラー(個々に似合う色)を上手に使って、いい感じにカラーコーディング(ネットしてください。パーソナルカラーと言っても、赤、青、黄というふうには色相を単純に決めてしまうことではありません。黄色と言ってもいろんな黄色があります。たとえば、レモンのような黄色、バターのような黄色、そしてマスタードのような黄色とそれぞれ違っていま

す。ピンクもサーモンピンクとショッキングピンクではイメージが大きく変わりますね。自分に似合う黄色やピンクはどのイメージなのかを知っておくことが大切です。

人はそれぞれ個性を持っています。自分の個性を知ることが難しいかもしれませんが、一度客観的にチェックしてみませんか。もし、あなたを花でたとえたとしたら何の花でしょうか？また色で表現するとしたらあなたとはどんな色かしら？まわりの人にも聞きながら、ぜひ考えてみてください。

カラーの仕事が始めて十五年。多くの人たちそれぞれの個性を生かす色を見つけることにより、色を通して、それらの人たちの生活がより素敵に彩られ、楽しく演出されるよう様々な形でサポートしてまいりました。昨年春からは、シニア世代の方々により円熟したおしゃれを習得していただこうと「シニ

ア〈おしゃれHAPPY作戦〉セミナー」を各地で開講し、一人ひとりに本当に似合う色を見つけて、かつこいい熟年世代づくりのお手伝いをしております。

「色は力」——私の今年のテーマです。色は人の心を楽しませ、色は人の心を和ませ、そして色は人を美しくしてくれます。そんな素敵な色の力を意識しながら今年も皆様とともに輝きたいと思っています。

歴史文学まつりを 終えて

荒川康男

（女子大学文学部研究室事務室主任）

去る十月二十四日・二十五日

に「第二回城崎文学まつり——同志社女子大学・城崎町 歴史文学まつり」（城崎温泉観光協会・本学共催）が開催された。城崎

と言えば、文人、墨客の足跡多き文学といで湯の町として全国的に名高い観光の地である。「なぜ、この町と？」と首をかしげられた方もおられるだろう。縁結びは、創立者新島襄先生である。新島先生は、今から百十余年前の明治十五年四月二十四日にこの地で一泊しておられる。

ただ残念なことがひとつ。一泊と言わず、せめてあと二、三泊して、ゆっくり温泉に入り、城崎を楽しんでおられたら、「城崎町文芸館」に飾られている、志賀直哉や与謝野晶子といった著名人の写真や作品の隣りに名を連ねられたであろうに。この大きな縁の導きか、我が女子大学とは文学のみならず、今春新設の現代社会学部社会システム学科（京都学・観光学コース）とゆかりの深い地なのである。

そもそも、より一層の地域活性化を目指す協会から依頼を受けたのは半年前。本学にとって、一般参加を主役とした、地

域と大学との交流は長年の理想であった。開かれた大学とは言え、一般への門戸はまだまだ高い垣根に囲まれている。この現状を大学側から打破することを目指し、生涯学習時代における大学の在り方を探る、初のイベントである。

第一日目は、オープニング・セレモニーと「城崎短歌コンクール表彰式」の後、与謝野鉄幹・晶子、前田純孝に関する講演（安森敏隆教授）、城崎温泉の縁起についての講演（寺川真知夫教授）が行われた。一日目の催しの無事終了に落ち着く間もなく、夜は翌日に向けた打合せ。長時間に及び、楽しみにしていた露天風呂にも入れず、床に就くと深い眠りに入る前に眩しい朝日に起こされた。二日目は、王朝女流文学と平安京との連関についての講演（龍谷寿教授）、日本の観光産業の将来像を展望したホスピタリティについての講演（山上徹教授）が行われた。パッ

シヨネイトな講演と熱心な来聴者により活況を呈し、高岡いずみ氏の華麗なピアノ演奏が花を添えた。

多彩な催しの中でもとりわけ

注目されたのは、「城崎短歌コンクール」である。「城崎」「夏」「浴衣」「下駄」「温泉」「月」「柳」の七つをテーマに、城崎温泉宿泊者および一般から募集し、最優秀賞、優秀賞、佳作、入選作品を選び表彰しようというものが。公募期間はたった二カ月であつたが、全国より五歳から九十歳代と幅広い層から千通を超える応募があり、文学への深い興味とまつりへの積極的な参加意欲を痛感した。また、それらの七割は、宿泊者からであり、臨場感あふれる作品が多かつた。そのため、当初は三十六選の予定であつたのだが、優秀作品が多数に及んだため、急遽百選とすることになり、「城崎短歌コンクール入選作品集 城崎百人一首」と題した、小倉百人一

首に勝るとも劣らない(?)記念集発行の運びとなつた。この喜ばしい急変への対応には、正直我ら事務局としては戸惑いもあつたのだが……。

最優秀賞には、石戸ハナさん(八十二歳)が詠んだ「なぬ(地震)のがれいのちひとつで来し城崎山山川岸黄の花が咲く」が選ばれた。阪神大震災直後に心身の癒しのため訪れた城崎。そこで出会つた黄の花から受けたなぐさめの心情表現は選者の安森教授も激賞だつた。実は石戸さんは、末期ガン告知を受けており、現在は尼崎市内の病院にて療養中(後日、訪問し、授賞式を行つた)であるが、今回の受賞に、「生きる元気がわいてきた」と感激の声を上げ、受賞歌を自ら筆で書くほどの喜びようであつた。この時間を共有した私は、石戸さんの芸術への情熱を感じると共に、ある新聞社が「三十一文字 がんをいやす」と掲載したように、「文学」のある

べき姿、奥深く幅広い無限の力を見たような気がした。

城崎ならびに本学双方における目的が達成されることを祈りつつ、さまざまな面でご支援くださつた方々へ心よりお礼を申し上げたい。そして、無事終了した喜びと安堵感に浸る今、次は、プライベートでしつとり温泉観光客として訪れる計画である。

同志社カレッジソング を作詞した人

国松俊英

(児童文学作家)

'64年大学商学部卒業

いまから九十五年前、明治三十八(一九〇五)年二月二日のことだ。ひとりのアメリカ人が、滋賀県八幡の駅に降りたつた。

ウィリアム・メレル・ヴォーリズといい、コロラド大学を前年に卒業したばかりの二十四歳の

青年だつた。滋賀県立商業学校の英語教師として赴任するため、アメリカからやってきた。

彼は、建築家になろうと思つて大学で学んでいたが、YMCAの活動も熱心にやっていた。

活動の中で、トロントで開かれた「海外学生伝道奉仕団」の世界大会に出席し、神に新しい道を示される。「東洋の見知らぬ国に行つて、キリスト教の伝道をしよう」と決意して、日本にやってきたのだ。

ヴォーリズは英語教師をしながら、放課後、バイブルクラスを開いて伝道の仕事を開始する。若くて気さくな彼は、すぐに生徒たちの心をつかんだ。バイブルクラスには、一月月すると二百名の生徒が集まるようになった。そのうち、教会に通つたり、洗礼を受ける者も出てきた。

ヴォーリズの熱心さとその影響力に、町の仏教関係の人たちが恐れをなして、滋賀県庁に圧

力をかけた。そのため、二年間だけで商業学校の教師の職を解かれてしまった。

同志社や早稲田など他の学校から、英語教師として来ないかとの誘いがあった。ヴォーリスはすべて断り、八幡に留まって伝道の仕事をすることを決意する。神が自分に行けと命じた地、近江の八幡で伝道の仕事を続けよう、と考えたのだ。

教え子の吉田悦蔵などの協力もあって、彼は「近江ミッション(後の近江兄弟社)」を設立し、伝道を推し進めていく。明治四十一年には、大学で学んだ建築学を生かし建築設計事務所を開き、その仕事で生活や伝道の資金を生み出す。メンソレータムの輸入販売も始めた。

大正七年に、結核療養所の近江サナトリウムを開いたのをはじめとして、医療、教育、建築設計、出版と多くの社会事業を展開した。昭和十六年に太平洋戦争が始まるが、ヴォーリスは

アメリカに帰らず、日本国籍をとって「ひつやなまめれる「一柳米来留」と日本名を名乗る。

昭和三十三年、近江八幡市の名誉市民第一号になった。そして昭和三十九年の五月、八十三歳で亡くなった。

児童文学の仕事をしている私は、昨年、ヴォーリスの伝記、『ここが世界の中心ですー日本を愛した伝道者メレル・ヴォーリスー』(PHP研究所)を出版した。

滋賀県で生まれて育った私は、子どもの頃からヴォーリスの話聞いていた。そして学んだ高校が、ヴォーリスが教師として二年間教えた学校であった。そんなこともあってヴォーリスに興味を持ち、いつか彼の生涯を書きたいと考えていたのだ。

書くために調べていくと、ヴォーリスが同志社と深いつながりを持っていたことが判った。八幡に来たばかりのヴォーリス

を助けたのは、同志社神学校の教師たちである。同志社総寮長で宗教主任だった武田猪平牧師は、近江ミッションの運動に身を投じ、近江の伝道に大きな働きをした。

またヴォーリスは、同志社から建築も多く依頼された。致遠館、啓明館、旧図書館書庫、寄宿舎、新島遺品庫などを建てた。昭和七年に完成させた学生寮・アーモスト館は、昭和初期のすぐれた建築とされている。同志社カレッジソングも、ヴォーリスが明治四十二年に作詞したものだった。

メンソレータムや近江兄弟社の名前なら、知っている人は多いだろう。けれど、それらの仕事をはじめた人で、伝道に生涯を捧げ、多くのすばらしい仕事を遺したヴォーリスについて知る人は少ない。

愛と勇気を持って、人びとのためにひたむきに生きた人。同志社と深い結びつきのあるウイ

リアム・メレル・ヴォーリスのことを、多くの人に知ってもらいたいと思う。

「常滑」陶の歴史

久田重義

(陶芸家)

69年工学部工業化学科卒業

今から四十年前程前の常滑は、窯業製品を焼く窯の煙突が林立し、立ち上る黒煙で、雀や木々の肌は黒く、箆の中まで煤が入り込むなどと言われていました。数百もあった高い煙突は少なくなり、全て使われていません。小高い丘の上から見渡すと、当時を忍ばせる煙突のある窯場風景を見ることができ、市の観光に一役買っています。

常滑の歴史は窯業の歴史と言っても過言ではなく、古く平安時代に始まりました。鎌倉、室町、桃山さらに江戸、明治と続

き、焼物の技術は九百年以上受け継がれてきました。このように古い時代から途切れることなく現代に受け継がれてきた窯業産地が、日本には瀬戸、常滑、信楽、丹波、備前、越前の六カ所あり、これを六古窯と言います。

中でも常滑は最も古く、最大の規模を有していたと言われています。

平安末期（西暦一一〇〇年）頃から始まった、古常滑壺は、日本中の宗教遺蹟から発見され、須恵器と異なり、純日本的な宗教用品として誕生し、我が国のいわゆる国焼となっていることが注目されています。西暦一一三〇年から一一五〇年を中心とする平安末期の時代は、経塚が著しく普及した時代で、多くの古常滑壺が経塚壺に用いられていました。

平安から鎌倉時代には、経塚の根元地比叡山をはじめ各地の寺社と結びつき、常滑の経塚壺

は、海運の便によって、九州を除いた日本全土に運ばれ、大いに栄えていました。

近年に入ってその研究と共に、水野監物が桃山時代の茶道と古常滑の世界に大きくその姿を現してきました。

水野監物は三代目の常滑城主で、千利休、津田宗及と莫逆の間柄にありました。

比叡山と全国の修験道に関係の深い古常滑の窯を領地にもつ城主水野監物は、織田信長の比叡山征伐に反抗して本能寺の変には明智方に組したらしく、本能寺の変ののち、その失敗から常滑城をのがれ嵯峨天龍寺に入り、ついにのがれがたく割腹して果てました。天龍寺山内永明院に、今も監物の墓の小さな五輪塔が苔むしています。

その後常滑の窯は、壊滅的な悲境に立ち、中央との関係も絶たれ、平安以来の古常滑は大打撃を受けました。この痛手は大きく、江戸中期頃まで細々と甦

や鉢などの民具を作って、窯の火を守ってきました。

本能寺の失敗がなければ、常滑の窯は順風満帆の勢いで、桃山時代の茶陶の世界に君臨していたと思われます。

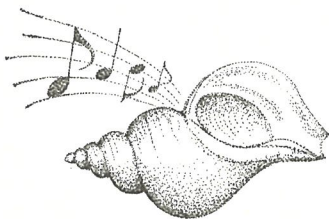
江戸中期に入り、常滑の窯は多少なりとも盛り返してきましたが、一度傾いたものはいくつか取り戻せなくて、茶会の歴史などには常滑の焼物は出てきませんでした。

朱泥の急須は約百五十年前の江戸末期であり、歴史は浅く、朱泥の朱色を出すのに随分苦労がありました。初代山田常山は朱泥急須作家の主流で、多くの子弟を養成した功労者であります。

明治以降は、朱泥焼、土管、容器、タイル衛生陶器、植木鉢等の生産に活路を見出ししました。

近年陶芸活動も盛んになり、国内外の陶芸展等で活躍する者も多く、平成十年には山田常山

氏が常滑焼（急須）で重要無形文化財保持者に認定されています。また、国際交流も盛んで、国内外から多くの人も勉強に訪れ、常滑で学び活動しています。私たちには、永い歴史と風土に培われた素晴らしい伝統があります。伝統は、恒に変わらぬ本質を持ちながら、現在を映し、永遠に歴史を刻んでいます。古きを学び、今を織り込む。陶を志す者として、時代を適確に反映したものを残したいと思



「時代」

越智礼子

(大学言語文化教育研究センター専任講師)

三島由紀夫作『仮面の告白』
(一九四九年)に次のような一節がある。

私はそのころY教授の国際
聯盟の講義の皮肉な効果を愛
していた。空襲下教授は鷹揚
にいつ果てるともしれぬ国際
聯盟の講義をつづけていた。
私には麻雀かチェスのお講義
をきいているような心地がし
た。平和！平和！このしじゅ
う遠くで鳴っている鈴のよう
な物音は、耳鳴としか思えな
かった。

戦争末期、数え年二十一歳時の
主人公の経験である。第二次世
界大戦の勃発を阻止できなかった
国際聯盟の講義を通して、空

襲下、Y教授は学生に何を伝え
ようとしたのか。終戦を予感し
た教授が未来を先取りし、機能
し得なかった国際機構の制度上
の不備を検証し、その欠陥を整
備した次なる国際平和機構の必
要を確固たる信念を持って説い
ていたのか。それとも、特高の
検閲に抵触することもなく、自
身の専門を鷹揚に講義していた
だけなのか。その真意・講義内
容はともかく、主人公には「現
実と遊離した虚しさ」しか聞こ
えてこなかった。しかし、「平和」

の二語は耳鳴として聞こえては
きた。「日常的現実から遊離した
虚しい言説」という一点だけを
取り上げれば、このY教授は二
十一年後の三島の姿に重なる。
そして、手法・思想は別として、
「経済至上主義に精神の荒廃を
見て警鐘乱打」した三十年前の
三島の声は、バブル経済を経験
した今、それなりの重みを持つ
て響いてくる。Y教授と三島に、
時代に阿(おも)ふことのない精神の氣

骨を見るか、時代に受け入れら
れない精神の悲哀を見るか。そ
れとも……

一九九〇年代に入ってから
の科学技術の飛躍的な発展・実用
化・事業化は目覚ましく、近代
工業化社会の枠組みを土台から
揺さぶっている。「価値観の多様
化」「権威の崩壊」を内包する
電子空間、DNA解説が病気の
予防・治療につながる生物工
学・遺伝子工学、等々。一方で
は、インターネットを利用した
犯罪の多発、生命倫理・個人の
遺伝子情報保護の問題、そして
情報技術革命の恩恵を受ける者
と受けざる者との格差、等々。
科学技術はどんどん先を行き、
そこにビジネスチャンスを求
め、効率と収益を追求する資本
が集まる。巨大資本が時代の動
向を決めるのであろうか。社会
も政治もどのような価値観で新
しいシステムを構築していくの
か未だ決定できない。情報技術
革命によって人類は新たな進化

の段階に入ったという人もい
る。しかし、産業革命がもたら
した様な光と陰を見る。

産業革命は技術・社会・情報
の各領域に相互作用的変革をも
たらし、空間・時間・物・因果
の概念を変え、前近代工業化社
会とは異なる世界観・価値観・
人間観を生み出した。そして、
分析的・還元主義的・線形的思
考に価値を置き、大量生産・大
量消費型社会を形成し、効率を
重視する生産者と飽くなき欲望
を追求する消費者を作り出し
た。欲望は、市場と資源確保の
ために戦争を引き起こし、環境
問題を生み出した。均質な人材
の育成が求められ、教育界もそ
の一翼を担った。

情報技術革命が進行し、国際
化の荒波が押し寄せ、産業構造
が転換する現在、個性・多様な
視点・自己責任を社会は求めて
いる。近代工業化社会と情報化
社会が求める人材の一八〇度の
転換に、「時代から遊離した大量

の人間」を作り出す社会の厳しさ・残酷さを、そして転換期に生きる個人の苦悩を見る。理念を持ち、自らの意志で「時代から遊離」していたY教授や三島の「苦悩」とは違った苦悩であり、疎外感である。

人は環境と相互作用しながら自己・価値観・世界観を形成する。今、大学にも実質的改革が求められている。時代に流されることのない精神・多様な視点・自らの意志で自身の人生の舵取りをする精神が育つ環境を作る必要を痛感する。

「出会いに導かれて」

人見ジュン子

(ギャラリー・ヒルゲート)
'72年大学文学部社会科学卒業

全くの素人が偶然画廊を始め、いつの間にか十二年がたちました。長びく不況の中、右も

左も分らないのによく潰れなかったものだと思いますが、この間の成り行きを考えると、つくづくと人の出会いということの大きさを感じます。

私が卒業した七二年は、ニクソンショックで採用が落ちこみ、特に女子学生の就職はまっ暗。学生運動にも多少関わり、劇研(七〇年に私達の世代が「サークル解体」と称して潰してしまいました)の活動やバイトで明け暮れて、授業にも殆んど出なかった私の成績では入社試験を受けることも程遠い状況でした。でも高校時代に父を亡くした身では、何としても自立しなければなりません。そんな時、河原町通でバツタリ会った文化団体連盟の先輩に一枚の願書をもらったのがきっかけで枚方市役所に入職しました。そこでウーマンリブのサークルを作り、当局にも組合主流派にも反抗するは、休みをとっては現地闘争に行くは、あまり

真面目とは言い難い職員でした。ところが、上司にも戦後の基地闘争や非法火焰ビン闘争に関わった人たちがいて、こんな私に社会教育や同和対策等のやりがいのある仕事を与えてくれたのです。

その仕事を通じて知りあった作家の水上勉先生が「あなたの実家の場所は画廊向きだから、お母さんにやる気があれば自分の作品を出品してあげる」と言われた一言が思いもかけず画廊を始める糸口となったのですから不思議なものです。

元々絵が好きだった母は大喜びで、小さなゴルフ屋を模様替え。私も仕事のかたわら企画や事務を手伝って水上先生展で開廊したのですが、それが終わるとさあ大変。何の準備も知識もなく始めた仕事ですから、次は何をすればよいのか見当もつかないのです。

そんな時に手助けしてくれたのが、様々な運動や仕事で出会

った友人たちでした。絵を描く人は個展を開き、少しお金のある人がそれを買い、そして「原爆の図展」に関わった友人達が作者の丸木位里・俊夫妻を紹介してくれたのです。何の実績もない小さな画廊の願いを聞き入れて、御高齢の御夫妻が初日に京都まで足を運んで下さった時の感激は忘れられません。以来毎年、十一回の展覧会を続けるうち、敬愛する丸木夫妻の作品をずっと扱っている画廊だから」という理由で、絵本や美しい水彩画で知られる安野光雅先生の個展を開かせていただく幸運にも恵まれました。

また、同志社の歴代総長の肖像画の内二枚を描いておられる、故・田中忠雄先生との出会いも忘れられません。先生は、美術家連盟の会長等も歴任された画壇の重鎮ですが、私の亡父が先生のお父様から洗礼を受けた、八十年以上も前の出会いを覚えていて下さり、展覧会を開

かせて下さったのです。無知な私に、絵のこと、画廊の仕事のことを優しく教えて下さった先生はまた、戦争画を描けなかった人でもありました。そのお姿に、私は内心反発してきた「キリスト教精神」というものの良きあり様を教えられた気がしました。

十二年の間には、母の病氣や遅ればせの子育て等、人が生きていく上でのごく普通の悩みもそれなりにありました。けれど、お客様の中には老人介護の専門家や子育ての先輩も多く、教えられたり励まされたり。仕事の関係も私生活の関係もごちゃごちゃのまま、出会いが出会いを呼び、小さな画廊は人が行き交う交差点のような場でもありません。

多くの作家やお客様や取材して下さった記者の方たち、そして古くからの友人たち……。思い起こせばこの世は何と素敵な人々に満ちていることでしょう。

支えられてばかりなのが少々気になりますが、人との出会いに学ぶことはまだ限りなくある、そんな気がしています。

追記 一月十三日に、俊先生が、亡き夫位里先生の許へ旅立たれました。寂しい思いです。

人の足跡に思う

平林克敏

(住友ゴム工業顧問)
57年大学商学部卒業

私の誕生日は十二月十四日、この日になると必ず思い出すことがある。一九一一年一月一日四日南極点に最初に到達したノルウェーのアムンゼン隊と、後れること三十五日、翌年の一月十八日に到達した英国のスコット隊のことだ。

死闘を繰り返し、ようやくたどり着いた極点にはノルウェー

の旗がはためいていた。落胆して帰路に就いたスコット隊五名は、荒れ狂うブリザードに吹き込まれ、十八キロ先の食糧や燃料の補給デポ地に行き着くことができず、帰路に着いて七十日後の三月二十九日テントの中で全員が凍死してしまうのである。

もう、三十年余りになろうか、私は誕生日になると、人類が極地の探險や秘境の地にくり広げた壮絶な生きざまに思いを馳せるのである。

南極点を最初に極めたアムンゼン隊の評価より、英国のスコット隊の方が多くの人に語り続けられているのは、スコット隊の悲壮な運命と、最後の日記によるものだと思う。

「……テントの外はただ荒れ狂う吹雪のありしのみ、いまやなら好転の希望を持ち得ず、われらは最後まで頑張るつもりなれど身は刻々に弱りゆきて、終局は遠からざるべ

し、誠に遺憾千万のことなれど、もはやこれ以上書きつづけ得るとは思われず」

R・スコット

「願わくはわれらの家族のうえをみまもりたまえ」※

縦長のフィールド・ノートに記された最後の部分を文末に載せたが、この日記は今も大英博物館正面二階の片隅に展示されている。

北極や南極の極点に達したのも、ヒマラヤの高峰登山が始まったのも、今世紀初めの頃からだ、極点をめぐる各国の競争はその一例にすぎない。当然のことながら、ここに至る迄にはさまざまな自然と人の壮絶なかわり合いがあつてのことだが、今や人類の足跡を知らない秘境の地は、海洋も含めこの地球からその姿を消そうとしている。

地理的な領域のみならず、自然科学の分野においても、地球物理学の立場からも、今世紀後

半は各々の分野で絶頂とも言える発展を上げたのである。

未知なるものへの飽くことなく求め続ける人の行為が、立ちはだかる障害を越えて未跡の分野を切り開いて来た結果である。この旺盛な思想こそ、新しい世紀に求められる最も重要な点であると思う。

危険を冒し未踏に挑む気概なくして人は前に進む事ができないし、本質に迫る高い精神性を育むこともできない。私がエベ

we shall shake it out
to the end but we
are getting weaker &
colder and the end
cannot be far.
It seems a pity but
I do not think I can
write more -

Robert

Last Sunday -
For Gods sake look
after our people

スコットの日記の最後の頁

エンスを實に見事に頭の中で体系化し、それを学問だとするわが国の従来からのあり方が精神の枯渇を招き、創造の芽を閉ざしたのだと思う。

新しい領域を自らの情熱と行動で切り開いて行く創始者としての役割が全ての人々に今、求められている。

誕生日にいつも自問自答しそして行動に移して行くことにしている。

※『極地集誌』加納一郎氏訳より

南アフリカ調査旅行

森 孝一

(大学神学部教授)

一九九九年八月三日、シンガポールから一挙にインド洋を横切って、飛行機は南アフリカのケープタウン空港に到着した。文部省の科学研究費をいただい

て、南アフリカのキリスト教の状況を調査するための旅である。

三週間お世話になったのは、ケープタウンから東に五〇キロにあるステレンボッシュ大学の神学部である。ステレンボッシュはオランダ系南アフリカ人（アフリカーナ）の町であり、同志社大学とほぼ同規模の大学のほとんどすべての講義は「アフリカーンス」（オランダ語の変形）で行われている。

アバルトヘイトは制度としては廃止され、一九九四年に行われた選挙でマンデラ大統領が選出された。多文化主義を掲げる新憲法が作られたが、私が見た南アフリカには、いまだにアバルトヘイトは実質的にはそのまま残っていた。

人口の二割弱の白人が、南アフリカの富の九割を握っているという状況は変わっていない。法的には人種による居住地域制限はなくなったが、高価な白人

居住地域の住宅を黒人が購入することは不可能である。

ステレンボッシュの町は、オランダをそのまま持ってきたような美しい町だが、町外れには、アパルトヘイト廃止後に移り住んできた黒人の居住地域が広がっている。そのほとんどは、「掘っ立て小屋」と言ってもいいようなひどいものだ。経済格差の極端な違いは、治安の悪化を生み出しており、エイズ感染率が四人に一人ということも相まって、白人は武装して「自衛」している。

経済的不平等を解消するため、新政府はアメリカのような「アファーマティブ・アクション」(機会均等法)を制定し、黒人の雇用を増やすことに努力している。しかし、これはある種の逆差別を生み出しており、白人の若者のなかには将来への不安から、外国に仕事を求める傾向が強まっている。大学の学生會館のなかには、外国での就職

を斡旋するセクションが設けられている。このような頭脳流出のために、南アフリカでは医師が不足し、キューバなどからやってくる外国人の医師に頼るという状態が現れている。

「経済的不平等が生み出す治安の悪化」は人種間の交流を妨げており、白人は黒人居住区に足を踏み入れることに恐怖心を抱いている。これは富める国からやってきた私のような旅行者も同様である。

初めての調査で、黒人居住地域に入っていく手だてがなかったため、旅行社の「タウンシップ・ツアー」に参加した。十人乗りのライトバンで、何組かの旅行者とともに、半日、「タウンシップ」と呼ばれるケープタウン近郊の黒人居住地域を見学するツアーである。「ケープフラット」と呼ばれる地域には、何十キロにもわたって、ひどい状況の黒人居住地域が続いている。ライトバンは地域のコミュニ

ティ・センターに到着し、その主事である青年に案内されて、歩いて地域を見学させてもらった。比較的小綺麗な「ビバリーヒルズ」と呼ばれている集合住宅もあるが、ほとんどは、水道も便所もない掘っ立て小屋である。

ライトバンの運転手兼ガイドは、つぎに私たちを地域内の小学校に案内してくれた。この小学校は出生証明書のない子供たちのためのものである。出生証明書のない子供たちは、公立小学校に通うことができない。このような子供たちのために、旅行社が経済的援助を行って作られた小学校である。

毎日、午前十一時に、ツアーのライトバンがやってくる。それから二十分間、黒人女性の校長先生が地域と子供たちについて説明し、その後、子供たちが数曲の歌を聞かせてくれる。これはこの小学校の時間割りに組み込まれている。教室はあまり

大きくない教室が一つあるだけで、それを四分割して年齢別のクラスが持たれている。教室は生徒で「すし詰め」の状態である。

生徒たちは日課として整然と、観光客である私たちに歌をさかせてくれた。お金を払ってツアーに参加し、子供たちの授業時間を妨害している自分に対して、最初は「植民地主義的」嫌悪感を覚えた。

最後の曲は反アパルトヘイト運動のなかで歌いつがれ、現在は国歌となっている「ンコシ・シケレリ・アフリカ(神よアフリカに祝福あれ)」であった。その美しい旋律を、生徒たちは目を輝かせ、声一杯に歌いあげた。新生南アフリカ共和国と自分たちの将来に対する生徒たちの誇りが、はつきりと私の胸に伝わってきた。

アメリカ合衆国は南北戦争終結後百三十年以上が経っているが、未だに「アメリカの夢」で

ある平等な社会の建設に成功してはいない。南アフリカ共和国の場合は、アパルトヘイト廃止後まだ十年も経っていない。さきにも述べたように、南アフリカの将来には困難な問題が山積している。しかし、子供たちの誇らしい表情のなかに、私は南アフリカの将来を見ることができたように思った。

私の天職

山口 忍

(在パキスタン日本大使館専門調査員)
'91年大学文学部文化学科卒業

最近では、海外で様々な国際協力に携わる日本人が増えている。国連や国際機関、またJICA(国際協力事業団)などを通じて数多くの専門家が海外で活躍している他、最近ではNGOのメンバーとして海外に出て行く人の数も多くなっている。

かく言う私も、学生時代に国際協力に興味を持つようになったから、カンボジア及びパキスタンでこうした国際協力の現場で働く機会を得た一人である。

カンボジアでは、ユネスコ(国連教育科学文化機関)及びユニセフ(国連児童基金)で教育プロジェクトの実施に携わった。現在は必ずしも国際協力をメイ

ンのフィールドとしている訳ではないが、在イスラマバード(パキスタン)日本大使館で、専門調査員という立場からアフガニスタン問題に関する調査・研究を行っている(なお、専門調査員についての詳細は外務省のホームページ等で知ることが出来るので興味のある方はご覧になって頂きたい)。アフガニスタンは、かつてのカンボジアと同様に二十年以上に亘る内戦のために国内のあらゆる社会基盤が破壊され、全土を掌握する政府もないまま、混乱状況が続いている国である。コソボや東ティモ

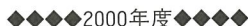
ール等の問題に隠れて、あまり日本の報道には登場してこないが、アフガニスタンからは今も四百万人以上とも言われる難民が出るなど、悲惨な状況が続いており、日本も含め国際社会による人道援助は現在も続けられている。アフガニスタン問題を担当する私もこうした関係から援助関係者と接触したり、実際の現場を視察する機会も少なくないことから国際協力とは全く無縁でもない。

振り返ってみると、私が国際協力という分野に興味をもったのは、学生時代のことであるが、その当時は必ずしもこの分野の仕事に就くことを考えるまでには至っていないかった。話は少し逸れるが、私が同志社に在学していた頃、文学部の井上勝也教授のゼミで学んだことで、今も記憶に残っているのは、新島襄が同志社建学にあたってその範としたリベラル・アーツの精神であった。私は学部を卒業後、

国際基督教大学(ICU)の大学院に進学したが、今振り返ってみると、学生時代に学んだことは、職業人となるための「実学」だけではなく、学部時代の「虚学」とも言えるリベラル・アーツ的な学びを通じて自分の天職とは何かということを考えることができたのではないかと思う。学生時代、教育学を専攻したものの、必ずしも教員になることや研究者になることを目指していた訳ではなかった自分にとって、幸運にもこうした環境の中で、何の職業に就くかという前に、職業を通じて自分は何をするのかということについてじっくりと考える機会があったことは今の私を形作るうえで、重要なことであったと思う。自分にとっての天職を考えるなど、学生時代にとくに卒業していなければならぬのだろ

思えるような仕事を見つけること
 と自体はさほど重要なのではなく、
 実は平凡ではあるが、如何に
 生きていくかということを確立
 することの重要性をいまにな
 って感じる。かく言う私もいま
 だに自分の天職は何であるのか
 という問いを反芻している一人
 であるが、国際協力の仕事は必
 ずしも安定した生活を保証して
 くれるものではないものの、こ
 の仕事を自分のフィールドとし
 ていくことに最近やっと納得で
 きるようになった。大学を卒業
 してすぐ定職に就かなければな
 らないという考えもあるが、平
 凡な一学生であった私でさえ、
 どの会社や組織に属するかを考
 える前に、自分のやりたいこと
 は何かということを追い求める
 ことができたことは幸運であっ
 たと思う。最近では、国際協力
 に対する一般の関心も高まり、
 将来この分野で活躍することを
 希望する学生も増えてきている
 ようであり、頼もしい限りであ

るとともに、私自身この分野の
 専門家となるべく、努力を続け
 ていかなければならないと感じ
 ている今日この頃である。



同志社大学公開講座のお知らせ

同志社大学では人文系・自然系各6回の講義を、学内外から毎回違う講師を迎えて行
 います。受講料は無料。開催場所は京田辺校地。申し込みの締め切りは4月14日(金)
 です。詳細のお問い合わせは、京田辺校地教務事務室(☎0774-65-7050)まで。

人文系 (全6回)	『考古学に歴史を読む』 —お金(貨幣)の考古学—	
日 程	講義テーマ	講 師
5月16日 (火)	考古学と発掘された貨幣 —和同開珎から寛永通宝まで—	同志社大学 名誉教授 森 浩一
5月30日 (火)	朝鮮半島と琉球諸島におけ る銭貨流通と出土銭	仏教大学 文学部助教授 門田 誠一
6月13日 (火)	江戸時代の経済発展と 紙幣の流行	大阪大学名誉教授 作道洋太郎
10月10日 (火)	渡来銭の大量埋蔵が語る 中世の文化と経済	同志社大学 歴史資料館学芸員 鋤柄 俊夫
10月24日 (火)	ギリシャ・ローマにおける 貨幣	同志社大学 文学部助教授 中井 義明
11月7日 (火)	銀の大阪、金の江戸 —江戸時代の金融ビジネス—	同志社大学 商学部教授 石川健次郎

自然系 (全6回)	『人と自然』 —「誕生」の奇跡と不思議—	
日 程	講義テーマ	講 師
5月19日 (金)	農耕文明の発生	京都大学大学院アジア・ア フリカ地域研究科教授 古川 久雄
6月2日 (金)	クローン植物の可能性	キリンビール(株) 植物開発研究所 大川 博志
6月16日 (金)	生命誕生 —ヒトの体のでき方と生殖技術の進歩—	京都大学 医学研究科教授 塩田 浩平
10月6日 (金)	トキの人工増殖と野生復帰	佐渡トキ 保護センター長 近辻 宏晃
10月20日 (金)	衛星画像解析の事始	同志社大学 経済学部教授 醍醐 元正
11月10日 (金)	熱帯林に生きる —生物多様性と人々の暮らし—	京都大学生態学 研究センター助教授 湯本 貴和